

【フォーラム—現場から問いかける—】

変わらない人生の宝物

今野花菜（福島民報社）

「伝えてくれてありがとう」。取材相手からいただく言葉に幾度となく力をもらいながら、私は現在、福島県の新聞社で記者をしています。地域行事やスポーツ、事件や事故などさまざまな現場を経験し、毎日が新しい出会いと学びの連続です。新聞は私にとって、「人々の思いの交差点」です。記事を書くことで、誰かの心に寄り添うことができるのです。私は記者の仕事が大好きです。失敗も数え切れないほどありますが、「失敗すること自体は悪いことではない。反省を次に生かし、挑戦を続けて」と先輩記者の言葉に背中を押され、いつも前のめりで取材に臨んでいます。

入社当初は大学など教育現場の取材が多い部署に勤務し、秋からは事件や事故、火災などをメインに担当する社会部に配属となりました。扱う取材内容は決して明るい話題だけではありません。被害者や遺族などに話を伺うこともあります。何も語りたくない人、話したくても気持ちの整理がつかず言葉にできない人…。真摯な姿勢でそっと寄り添い、話せる時が来るのをともに待ちます。小さな声を取りこぼさないよう耳を傾け、相手が伝えたい思いを全身で受け止めるよう努めます。行動科学で学んだ「傾聴」の重要性を改めて強く感じる瞬間です。行動科学プログラムの講義や実習、ゼミなどを通じて「相手の心と向き合い考え続ける」「感じたことを客観的に言語化する」という経験は本当に貴重なものでした。大学での学びを忘れず、実直な対話で丁寧に言葉をつむぎ、取材相手に「あなたにだからこそ話したい。あなたの書く言葉に託したい」と思ってもらえるような記者になりたいです。

「記者は足で稼ぐものだ」。報道業界に入り多くの人に教えていただきました。現場に実際に行くからこそ分かることがあり、視覚、聴覚、嗅覚など五感を働かせて真実を見つけなければなりません。事件・事故が起こった時、関係先を一軒一軒尋ねて情報をつかむ「地取り」と呼ばれる取材があります。地道な活動で、根気と体力が必要です。私も殺人や強盗事件の発生時に周辺の家々に聞き込みを行いました。有力な話を得ることができず、くじけそうになった時は「ここで止めたら事件の本筋が分からない」と自分を奮い立たせて、納得がいくまで取材を続けています。思い返せば、卒業研究も試行錯誤の連続で、思うように結果が出ないこともたくさんありました。それでも、妥協せずに何度も先生や仲間と解決への道を探し続けた経験が「どんな時も諦めない心」を育ててくれました。また、手掛かりを求めて何時間も歩き周る中、ふと「社会調査法」を思

い出して懐かしい気持ちになりました。取材相手への接し方や質問の方法など、至る所で行動科学で培った知識が確実に生きているのだと思います。

私は在学時、奥野雅子先生のゼミに所属し、臨床心理学分野で非言語コミュニケーションの研究に取り組んでいました。笑顔やうなずきなどの非言語行動を何時間も1人で計測・分析し、膨大なデータと向き合って結果を考察することに苦しきを感じ「自分の研究は何の意味があるのかな」などと考えてしまうこともありました。そんな時、奥野先生をはじめ、ゼミやコースのみんなが「頑張って」ではなく「頑張ろう」と励ましてくれました。研究活動は個人のものですが、1人で頑張っているわけではありませんでした。皆が相手の研究を自分事のように考え、一緒に悩みながら進んでくれました。社会人となった今も、時折「自分が記事を書く意味は何か」と葛藤したり「書く責任」にからだが硬くなってしまうこともあります。記事にしよう。大丈夫、きっと書ける」と取材をサポートしてくれる先輩や同期に支えられて、毎日県内を駆けめぐって地域の人々の声を拾い続けています。研究も仕事も、自分だけの力では成し遂げられず、多くの人に助けられているのだと日々感じています。人との出会いが人生のなによりの宝物です。これからも一期一会を大切に、自分の成すべきことと向き合い、周囲への感謝と敬意を持ちながら生きていきたいと思っています。

結びに、大学生活を応援してくださいました行動科学の皆様にも一度感謝申し上げるとともに、皆様のご多幸とご健勝をお祈りいたします。